

尾小屋鉦山の歴史概要

尾小屋鉦山の始まりについては詳しくは知られていませんが、最も古い記録として「天和2年（1682年）、茶屋吉左衛門が無断で採掘し、お叱りを受けた」という記録があります。このほかにも江戸時代の記録がありますが、本格的な採掘は明治に入ってからでした。

明治11年（1878年）、橘佐平という人が尾小屋の「松ヶ溝」というところで銅鉦の露頭を偶然発見。翌年には山岸三郎兵衛という人が採掘を試みたのですが、うまくいきませんでした。

しかし、明治13年（1880年）、元士族の吉田八百松など6人が採掘を開始。加賀藩家老であった横山家の13代・横山隆平と、その叔父・横山隆興も仲間に加わりました。

翌年の明治14年（1881年）には、横山隆平が鉦業権の一切を買い取り、「龍宝館・尾小屋鉦山」を創業。隆平が社主、隆興が鉦山長となり鉦山の経営にあたりました。借金を負いながらも鉦区の拡張を行い、明治20年（1887年）には豊富で良質な鉦脈（太田坑）に当たりました。

その後、明治29年（1896年）に大洪水による作業場の流出がありました。鉦山長・横山隆興の陣頭指揮により一挙に挽回。明治37年（1904年）には、尾小屋鉦山と岐阜県にある平金鉦山とを合併して、合名会社「横山鉦山部」を創立。事業は順調に展開し、日本有数の鉦山へと発展していきました。

しかし、第1次大戦後は不況により経営が低迷。坑夫たちへの賃金遅配が続き、大正9年（1920年）から大正11年にかけて5回にわたるストライキが起きました。



横山家経営期の尾小屋鉦山（本舗坑口）



大正14年の尾小屋鉦山選鉦所

これに対し横山家は会社を抵当に入れて資金を調達しましたが、それも続かず、昭和6年(1931年)7月、尾小屋鉾山の売山権を従業員に譲渡。12月には宮川鉾業に売却され、宮川鉾業から日本鉾業株式会社へ尾小屋鉾山が譲渡されました(宮川鉾業は久原鉾業(日本鉾業の前身)が尾小屋鉾山の買収のために設けた会社でした)。

昭和6年(1931年)12月、大争議を経て、日本鉾業株式会社が尾小屋鉾山の経営を再開。その経営方針と新しい技術導入によって、次第に拡張・整備されていきました。昭和9年(1934年)には尾小屋鉾山本山から離れた金平金山・金平銅山を買収して金平支山とするなど、鉾区を拡大していきました。

昭和10年代は、戦時中ということもあって量産が求められ、どんどん開発が進められました。しかし、終戦後の昭和20年(1945年)10月~翌年3月、戦時中の乱掘や坑内状況の悪化により十分な採鉾量が確保できず、操業を一時中止せざるを得なくなりました。

昭和21年(1946年)4月より操業を再開。その後、選鉾・製錬での新しい取り組みや、輸送の合理化が行われ、昭和30年ごろをピークとして経営が好転していきました。

しかし、そのピークを過ぎると、良質鉾の枯渇、製錬コストの上昇、さらに貿易自由化に伴う安価な海外銅の国内流入によって経営が苦しくなりました。

そして、昭和37年(1962年)3月31日、製錬の火が消え、尾小屋鉾山の製錬所が廃止。次いで同年9月1日には日本鉾業株式会社から新たに分離独立した北陸鉾業株式会社が経営を継承し、9月30日には尾小屋鉾山本山が閉鎖されました。

その後は、北陸鉾業株式会社によって、尾小屋鉾山本山から離れた大谷支山(大谷坑・金平坑)を中心に、採鉾・選鉾のみの操業が行われました。しかし、経営が振るわず、昭和46年(1971年)に大谷支山が閉山。尾小屋鉾山全面廃止となりました。



昭和10年の尾小屋鉾山製錬所と煙突



昭和33年の尾小屋鉾山事務所